

いらっしやいませ、ごちそ  
うさま

二丁

いらっしゃいませ、ごちそうさま

聞いた話では、その化け物は何にでも姿を変えられるそうだ。

「おっかねえよな」

隣に住む爺さんが、目を細めてぽつりと言った。選んだ言葉とは裏腹に声色から怯えは感じない。いつもの野次馬根性を惜しげもなく見せつけてくれる。このジジイときたら、もう八十近くいせに性欲と週刊誌さながらの下品な好奇心だけはまるで衰えていないのだ。

「どんな奴なんだろうな、あんちゃんは見たんだろ？」

「ええ、まあ」

わたしは答える。数十分ほど前、散歩に出た折りに化け物を見てしまったのだ。化け物は、人の姿に化けていた。

大通りから脇道に入る人気のない裏通り。缶コーヒーを飲みながら鼻歌混じりに歩いていると、女がじっとこちらを見ていることに気がついた。通りの真ん中に立ちすくむその女は、冬だというのに、露出のきついタンクトップとミニスカートという格好で、色っぽいと言うより痛々しかった。目があつた、何となく気味が悪い。けれどその場で引き返すのはどうも失礼な気がする。どうしたものかと迷っているうちに、背後から声がした。

その声がわたしではなく女にかけられたのは明らかだった。振り返ってみると、頭の悪そうな茶髪の男が鳥肌が立つような甘ったるい台詞を吐いている。女をナンパしたいらしい。わたしを無視して、男は女に近づいた。なれなれしく肩に手を回して、時代遅れな言い回しで女を口説いた。

ばつが悪い、とっと帰ろう。そう思って回れ右をした。

「ぎゃっ」

蛙の潰れる音がした。振り返ってしまうまでそれが悲鳴だと気がつかなかった。

頭を無くした男が酔っ払いのように危なっかしくよろよろと歩いてくる。やがて力尽きると、崩れ落ちた。その拍子に首から血が飛び、わたしの靴を濡らした。

吸い込まれるように前を見る。口の大きく裂けた女が、心底美味そうに男の首をしゃぶっていた。訳の判らぬ悲鳴を上げて、わたしは尻餅をついた。こいつが、例の。

ここ数週間、人が食い殺されるという事件が多発していた。目撃者の証言では、何かとんでもない化け物だったという話だ。人の姿をしていることもあれば、犬の姿だったこともあるそうだ。獲物が油断したところで本性を現し、突然変形し獲物を食い殺すそうだ。事件の数は日を追って増し、自衛隊が出動したという噂もあった。

「けっ、けけ」

化け物と目が合う。

「けけ」

奇声を上げながら化け物が突進してきた。思わず失禁してしまったが、そんなことを気にしている場合ではない。学生時代の思い出が脳内を駆け抜けたとき、化け物はわたしの前から突然消

えた。

それをはっきり認識するより前に、後ろから悲鳴が上がる。

壁に寄りかかりながら何とか立ち上がった。見ると、化け物が縦横無尽に飛び回り次々と人を刈っていた。

「けけっけ」

腕だった部分を刃物に変形させ、次々と人を切り刻む。ときには体そのものが大きな口に変形し、丸呑みにした。わたしが助かったのは、よりたくさん獲物に惹かれてのことだろう。

銃声がある。自衛隊だった。化け物はひととき大きく跳ねた。

「逃げるぞ、仕留めろ」

誰かの怒鳴る声、小銃をたやすく避けながら化け物は駆けていく。ねぐらに向かったのだろう。

わたしは自分の小便の冷たさに震えながら、家に向かった。爺さんに声をかけられたのはどうにか玄関口までたどり着いたときだった。

「あんちゃん、聞いたか？ 例の化け物の巣がここいらにあるらしいぞ」

そう言うとなわたしの襟首を無遠慮に掴む。

「さあ、見物だ」

化け物は、意外なことにちゃんとした家に住んでいるらしかった。ちゃんとしたと言っても、状態は酷い。長らく空き家になっていたらしかった。ところどころ窓ガラスが割れ、長い蔦が屋根まで巻き付いていた。二階建ての小ぶりの洋館で、いかにもホラー映画にでてきそうな館だった。

自衛隊が館を包囲している。命知らずの野次馬たちを下っ端らしい隊員たちが敷地の外に押しとどめていた。

「おうおう、ここか」

爺さんは嬉しそうに自分の場所を確保した。こいつが食われればいいのに。

「爺さん、下がってる」

爺さんは下っ端隊員をあしらいながら飛び跳ねて、少しでもよく見物しようと頑張っていた。

「ここに、化け物が？」わたしは下っ端に尋ねる。

「そうらしい、だがまあ心配いらん。包囲しちまえばこっちのもんだ。もうすぐ突入して人間様の力を思い知らせてやるよ」

「聞いた話じゃあよ、奴はなかなか頭が回るそうじゃねえか」爺さんが下っ端に絡み始めた。「おめえらで大丈夫なのか？」

「頭がいい？ はっ、しょせん動物さ。奴の頭にやもっとたくさんメシを食うことでいっぱいなんだ」

「足下すくわれるんじゃないかねえぞ、まあそれはそれで面白いけどよ」

爺さんはまた跳ねる。

「おっ、突入するみたいじゃねえか」

小銃を構えた隊員たちが配置についていた。ハンドサインで三つ数えてから、扉を爆破する。隊員たちが、館になだれ込む。ずいぶんと大規模だった。一個小隊ほどはいる。

「奴もこれで終わりさ」

下っ端は誇らしげに言う。割れた窓から隊員たちが見える。自分の手足のように銃を操り館を制圧したい。頼りになりそうだ、高い税金を払ってきた甲斐がある。

「ところでよ」

爺さんは何か思い出したらしい。

「こんなところに館なんかあったか？ こないだ通りかかったときは、ゴミ捨て場だったような気がするんだが——」

前を向くと、館は消えていた。荒れ果てた更地に大きなげっづがこだました。